

月下の運動会

千葉県白井市 長野 和夫

溪谷を吹き渡ってくる川風が、朝からの暑い陽射しを和らげている。リュックを背にした五人ほどの女性グループが駅を出て、笑い声をまき散らしながら溪谷へ続く道を歩いていくのが見えた。

日本有数の工業地帯として壮大な石油化学コンビナート群の迎える表玄関から小さな電車で揺られて約一時間。山あいを蛇行する養老川の溪谷を抱くこの地は、昔ながらの山里の風情を残している。周囲を川と海に囲まれて高い山のない房総半島においても、溪谷の左右には清澄山系にかけて山岳地が広がる。

羽嶋源二郎はバイクから足を下ろして、市原市内では一番高い標高二九二メートルの大福山に目を向けた。その名から福々しい饅頭のような姿を連想させるが、実際は山頂部の真ん中がへこみ、見栄えはあまりよくない。それでも幼いころから馴染んできた心と和むふるさとの山である。

養老川に架かる赤いつり橋を渡って梅ヶ瀬溪谷から大福山の山頂を巡る起伏に富んだ景観は絶好のハイキングコースで、溪流釣りも多くの釣り人を引き寄せている。

源二郎は、山風と川風のない混じる清々しい空気を深々と胸に吸い込んで、小湊鉄道の線路沿いに郵便局へ向けてバイクを走ら

せた。

東京湾から太平洋へ小湊鉄道と第三セクターのいすみ鉄道でつなぐ房総横断鉄道は、百年近くにわたって内陸の山間に暮らす人々の生活の足となってきた。人とともに無蓋貨車で木材や炭、薪、農産物、山砂利などを運び、山村の経済活動を支えてきた。

しかし、戦後の高度成長とともに道路網が整備されて物資の輸送はトラックに代わり、マイカー時代の到来で鉄道の利用は減少。慢性的な赤字経営が横断鉄道の存続を脅かしてきた。

近年の観光ブームにのって、養老溪谷を中心とした山里の風景が身近な観光スポットとして注目され、訪れる人が多くなった。春の桜や菜の花、秋の紅葉を車窓に眺めながらトコトコと走るレッドカラーのミニ列車がテレビの旅番組で紹介されることもあって観光客が増え、小湊・いすみ鉄道とも「観光レール」として持ちこたえている。

源二郎は、ハイキングコースの下車駅である「養老溪谷駅」からさらに上流の山村で代々続く農家の三人目の末っ子に生まれた。寡黙な父親に似たのか兄姉とも大人しく、源二郎も引つ込み思案な性格のままに育った。高校を卒業して東京都内の印刷会社に就職したが、大都会の喧騒と職場の人間関係の軋轢によるストレスに耐えられず、二年足らずで奥養老の山里に戻った。

運よく郵便局の配達員に欠員があつて採用された。赤い自転車での郵便配達の仕事は性に合っていた。配達区域の家々は赤ん坊から飼いだの名前まで頭に入れて、速く正確に届ける。この心構えだけで仕事は日々順調だった。

実直な人柄を見込まれて町内会や消防団などの地域活動にも引つ張り出されたが、何事も控えめに下働きに徹してきた。

郵便配達二筋に四十年、あと半年で定年退職を迎える。息子と娘はそれぞれ家庭を持って都会に住み、妻とふたりのつつましい暮らし。定年後の養老川での溪流釣りに思いをはせながら、退職の日までしつかり勤めを果たそう、と自分に言い聞かせて、郵便物の仕分け台に身をかがめた。

「お、タミさんに小包だ」

ひとつの小包に声を上げた。

「タミさんで、山で一人暮らしのインテリばあさん？あの前近は年寄りだけになってしまつて、住む人も少なるばかりだつぺよ。あのばあさんも娘さんのところへ身を寄せるつて聞いていたけど、まだ家にいるのかな」

向かい側で郵便物を配達順に並べていた同僚の大塚昇が、源二郎の手許をのぞき込んだ。

奥深い山肌にひっそり肩を寄せ合う集落の光景が源二郎の目の裏に浮かびあがり、山里の移り変わりが古い記録映画をみるように甦った。

林業が盛んだったころは、杉や檜の伐採、運搬、製材、炭焼きなどの山仕事に住人の数も多く、小湊鉄道が開通する前の昭和の初めまでは養老川で木材や竹を筏で流し、炭や薪、米、大豆などを川舟で五井まで運んだと聞く。

それがアジア初の東京オリンピックが開催された昭和三十九年の木材輸入自由化をきっかけにした林業の衰退で、住人は次々に

山を離れてまちに移り住むようになった。さらに、その後の東京湾の埋め立てによる京葉臨海工業地帯の造成で働き場所は一気に増え、農家の後継ぎも耕運機を納屋に仕舞って近代的な工場へ勤めに出た。

農家のカミさんたちも、いまや全国一の数とされるゴルフ場の草取りやキャディーとしてアルバイトに励むようになった。

住人の流出で小・中学校の統廃合が繰り返され、子供たちの教育のために市街地や千葉市内に住宅を買う人も増えた。農業で踏みとどまっていた源二郎の兄たちも高齢となつて、耕作放棄の畑が原野に戻りかけている。

櫛の歯が欠けるように寂しくなる山里に、林民子は一人で暮らす。狭い畑に野菜を作り、自給自足の穏やかな八十路を送りながら、本や新聞をよく読んでエッセイを書き、俳句や短歌を詠む。民子の投稿したエッセイや短歌が地元新聞の読者投稿欄に度々採用され、その採用通知や掲載紙を届けたときの民子の喜ぶ姿は、源二郎にとつてもうれしいひと時だった。

「ここんどこ配達に行つてないから、タミさん喜ぶぞ。どんな様子か、おれちよつと見てくるよ」

赤いバイクで駅前の家並みを抜け、県道から加速して山道に入る。しばらく走ると、段々畑を背に古い住家が点在する山あいの集落に着いた。木々の葉を揺らす風の音が通り過ぎるだけで、人の住んでいる気配はない。

ツゲの生け垣に囲まれた民子の家にも誰もいなかった。畑に出ているのかもしれないと、バイクを巡らせていると、廃校になつ

た小学校の跡地に建つ集会所の窓から民子が顔を覗かせていた。

「タミさんお元氣。はい小包」

「ゲンさんのバイクの音、久しぶり。こんな山んなかに悪かったね」

いつもはバイクの音を聞きつけて集落の住人が集まってくるのに、誰も姿をみせない。

「ほかの皆さんは、どうしているのかな」

「向かいのヒデお爺は老人ホームへ入って空き家になってるよ。キクお婆も入院しているし、みんな年寄りだから一人で暮らすのは大変なんだ。おらも横浜の娘とこに行かねばなんねえんだが、やることあるんで、迎えにくる日を伸ばしてもらっているんだ。ゲンさん、お茶いれるから、ちょっとくら休んでいってよ」

民子は集会所の炊事場に入っていた。玄関の上がり框に腰をおろして中に目をやると、畳敷きの広間に異様な光景が広がっていた。

長い紐につながれた色とりどりの万国旗が部屋いっぱいには花模様を描いている。傍らには運動会のリレーで使われる竹のバトン、紅白のハチマキなどが束になって積まれている。

お茶を運んできた民子が、小包を開いた。真新しい白い靴が現れた。

「娘から運動靴だよ」

「運動靴？向こうの座敷には万国旗に竹のバトン、ハチマキ。運動会みたいだな」

「そうだよ。小学校の運動会やるんだ」

「小学校は、ずっと昔に廃校になったんじゃないの」

「校舎はなくなったが、ほれ、校門と運動場は昔のまま残っているべな」

民子は座敷のガラス窓を開けて、広い小学校の跡地に目を向けた。

運動場のあった場所は一角をゲートボール場に整備しているが、あとは草に覆われている。

「そうか、卒業生たちが帰ってきて、なつかしい母校で運動会をやるうというのかな。おれはこの学校と統合した小学校を卒業したが、その小学校も閉校になってしまったからな。おれたちもみんな集まって、もう一度運動会がやれたら最高だけど、だれか呼びかけ人がいないとなかなか……」

民子は、「それがね」とひと呼吸おいて話した。

「十日ほど前の夜、お父さんがひょっこり帰ってきて、おらにこう言うんだ。今度の満月の夜に小学校で運動会をやるから集会所の納戸にしまっておく運動会の用具を出しておいてくれ、って」

「お父さんというのは、だいぶ前に亡くなったご主人？」

「そう。次の日の夜にも帰ってきて、今度は運動靴がないから用意してくれ、と言うんだ。それで娘に頼んで送ってもらったんだ」

民子は、たしか八十六歳。まだ足腰はしっかりしているもの、脳細胞の衰えで夢と現実の境があやふやになってきたのだろうか。

そんな源二郎の心中を見透かしたように、民子は真顔で「夢じゃないよ。二日続けてお父さんが運動会の準備をするように言いに

きたんだから、正夢だよ」

源二郎の戸惑い顔に、民子は上目遣いに「ゲンさん、更級日記って知ってるべ」

「え、更級日記？たしか市原に縁のある文学ということで高校の国語の授業で現代語訳したものを読んだ記憶があるな。ここ上総の役人の娘が京都へ帰るまでの旅日記のようなもんじゃなかったかな。最初の書き出しにへんぴな東海道の果てのさらに奥深い山里で育ったとあったのが、印象に残っていて何となく覚えているね。作者の名前は忘れたけど」

「そこまで知ってればりつぱなもんだ。今から千年も昔の平安時代に書かれたものでね。おらも図書館で借りて読んでみたんだ。上総の国司だったすがわらのたかすえのむすめ（菅原孝標女）が十三歳で上総を出てから京都で結婚して母となり、年老いていく四十年の生涯を綴った自分史でね。女流日記文学の代表作とも言われているんだ。上総から京都までの旅や、その後の暮らしの時々の気持ちや和歌に詠んでいてね。おらも短歌をやってるから、参考になるんだ。何回も読んだから、書き出しはそらでいえるよ」

民子はちよつと鼻をうごめかして、歌うように声を出した。「あづまぢの道の果てよりも、なお奥つかたに生い出たる人、いかばかりかはあやしけむかむを、いかに思いはじめることにか」「さすが、タミさん、すげえなあ。それで、何で急に更級日記の話になったのかね」

「夢だべな、夢。更級日記には夢の話がいっぺえ出てくるんだ。夢に出てきたことが不思議と現実起こったりする。夫が亡くな

るまえには金色に輝く阿弥陀仏が夢に現れてね。あとで迎えに来ようと、いわれた。源氏物語などの物語に夢中になって仏道に励むこともなかったことが夫の死を早めたのではと悔やんでいたが、阿弥陀仏は来世の幸せに導く仏さま。夫も自分も来世では幸せになれると、阿弥陀仏の来迎を信じて心安らかにわが生涯を書き残すと、最後をしたためているんだ」

「じゃあ、タミさんのご主人もあの世で幸せに暮らしていて、ふるさとのことを思い出しているのかな。小学校の運動会がなつかしくなって、タミさんの夢枕に立ったのかもしれないね」

「そうだと思うよ。運動会は村で一番の楽しみだったからね。おらの友達もみんな帰ってくるよ、きつと。満月の夜はしっかり運動会の準備をして待っていないとね」

「満月まであと三日か。タミさん、それまで何か困ったことがあったら、おれに電話してくれないか」

源二郎は民子の携帯に自分の携帯番号を打ち込んで山を下りた。

郵便局にいても、月夜の運動場にひとりぼつねんと佇む民子の姿が脳裏を離れず、そばにいてあげなければとの思いが募った。

妻の幸代に話すと、「タミさん、ちよつと心配ね。それで娘さんも一緒に暮らすことにしたんじゃないのかしら。タミさんとお月見するのもロマンティックでいいんじゃないの。でも、二人で夜中に運動場を走ったりしないですよ。だれかに一一〇番されたら困るから」と笑った。

満月の日。「タミさんに用事を頼まれてね。ちよつとひとつ走

り行ってくるよ」

大塚に断って山にバイクを走らせた。集会所のそばに建つ消防団の詰め所の駐車場にバイクをとめ、集会所を覗いたが誰もいない。野菜畑の間の坂道を民子の家へと歩いた。空には秋の雲が浮かんでいるが、風は熱気を含んでいる。日射病を警戒しているのか、民子の家につくまで人と会うことはなかった。

「タミさーん」。玄関から声をかけた。

「あら、ゲンさん、来てくれたの」と、民子が手をふきながらかけ出してきた。手土産のカステラの包みを手渡すと、「お父さんの大好物、喜ぶよ。いま運動会の弁当を作っているんだ。ゲンさんの分もこしらえるから、運動場で一緒に食べるべ」

民子は台所で、稲荷ずし、昆布巻き、里芋、コンニャクの煮しめ、卵焼きを重箱に詰める。村が賑わっていたころ、元旦やお盆、山の神祭りなどの催事に忙しく立ち働いていた山の女たちの姿が、思い出された。

民子も運動会が行われるとは信じてはいまい。生まれ育った山里を去る最後の満月の夜に、山の神や先祖の御霊に感謝の祈りを捧げる儀式をひとり執り行うことを決意したのである。

そう納得して、今夜は民子の気持ちに寄り添ってとことん付き合ってやろうと、心に決めた。

民子から重箱を預かって小学校跡地の集会所へ歩く。運動場の草むらには、虫の音が響き渡っていた。

「ゲンさん、手伝ってくれるかね」

座敷に置いてあった万国旗やハチマキ、竹のバトン、布袋にモ

ミ穀を入れた玉入れの玉を運動場に運んで草の上に並べた。

「あとはお月さんの出るのを待つばかり。何十年ぶりかね、運動会。早く友達みんなに会いたいよ」

集会所の座敷の窓辺に座って、虫の音と涼しい風に身をゆだねているうちに、眠気が忍びよってきた。欠伸をかみ殺す。

「ゲンさん、横になって休んだらいいよ」

民子が集会所の押し入れから枕を取り出してきた。

「じゃあ、少し休ませてもらうか」

枕を頭に体を横たえたと、すぐに眠りに誘い込まれた。

「ゲンさん、月がのぼったよ」

民子の声に窓の外に目をやると、天空をまるく切り抜いて黄金の蓋をはめ込んだような満月が、山の上に冴えわたっていた。

「ほら、村のみんなが集まってきた」

いつ帰っていたのか、月明かりのなかを人の列が続々と小学校跡地に残る校門を入ってきた。運動場の草むらは一面の白砂に変わり、その中央に高い杉の木が立てられ、頂から左右に万国旗が連なっている。風もなく、虫の音もピタリとやみ、運動場を静寂が包み込んでいる。

正面の朝礼台に羽織袴に威儀を正した白髭の老人が上がった。「おらが小学生のときの村長さんだ。いつも話が長くてね。あら、きょうはすぐ終わったよ」

続いて、白い帽子に白シャツ、白ズボンの青年が壇上に駆け上がった。

「あらまあ、おらの担任のジュンペイ先生だ。準備体操の号令か

けんだ」

「タミさんの先生？ずいぶん若いけど」

「二十三歳だよ」

運動場の回りにぎっしり座る村人のなかから短パンにランニングシャツ、ブルマー姿の子供たちが飛び出してきて運動場に広がった。

「おらの同級生もいるよ。あの赤いハチマキをした背の高いのはマサル、その横のちよつと太った子はカットシ。ミッチャんやトシちゃんも帰ってきてくれたんだ。うれしいね」

子供たちの後ろに大人たちも思い思いの運動着姿で並び、ジュンペイ先生の動きに合わせて体操が始まった。ジュンペイ先生の号令は聞こえない。民子は窓辺で「イチ、ニイ、サン」と小さく声を出して、一緒に手足を動かしている。

体操が終わると、竹籠をつるした竹の棒が二本運び込まれた。最初の種目は玉入れのようだ。子供と大人が入り混じって、竹の棒の先でゆれる竹籠へモミ殻を詰めた布袋の玉を投げ入れる。

「あら、まあお父さん。消防団長のときの半纏に新品の運動靴はいて、審判員で張りきっているよ」

民子が、男盛りの連れあいを見つけて弾んだ声を上げた。源二郎にも見覚えのある姿だ。村の消防団でしごかれた思い出が蘇った。

「こんどは買い物競争だね。おや、おらのおっかさんが出てきたよ」

カボチャやネギ、トマト、山芋などをずらりと並べて値段を書

いた紙をはりつけ、決まった金額分を袋に詰めてゴールインする。「おっかさんは計算が得意で買い物競争はいつも一番。ほら、こんども一等賞だ」

山仕事も運動会の種目に登場した。丸太をのせた木そりを数人の男たちが荒縄で引っ張って走り、ぶつかりあいながらゴールにだれだ込んだ。炭俵を担いで肩から肩へ次々に渡していく俵りレー。力自慢の山男たちの丸太切り競争と、幼いころの山の運動会にタイムスリップしたような光景を源二郎は息をのんで見つめた。

満月は運動場の真上に達して煌々と照り輝いている。月の光の満ちた白砂の上で運動会は続く。騎馬戦、百メートル走、大玉転がし、高飛び、子供たちの組体操。大福山の山頂に鎮座する白鳥神社の神輿も久々に引きだされて、祭り半纏の若衆が担いで運動場を一周した。

源次郎もよく担ぎ手と呼ばれたが、若者が少なくなり、神社の階段が長く急なこともあって、今は神事の日に氏子が担いで境内を回るだけになっている。

村の最大のイベントだった運動会の復活。だが、運動会につきものの太鼓をたたき旗を振り上げての声援や、御輿を担ぐ「ワツシヨイ、ワツシヨイ」のかけ声もない。虫の音ひとつしもない静寂の中で白い運動着が躍動する。

源二郎は、運動場の回りを埋める村人に目をこらした。顔は定かではないが、装いは着物や洋服と様々、軍服姿も混じっている。老齢な風体が多いが、白砂の運動場に走り出てくると子供や青年、

壮年へと変身して駆け回る。

自在に時が行き来する幽玄の世界。集会所の窓から差し込む月明りが来世と現世をつなぐ光の川のように座敷の畳に揺らめいている。

源二郎は、恍惚の表情で窓から身を乗り出して民子の上着の袖を引っ張って窓際から引き離し、ガラス窓をピシヤリと閉めた。

窓ガラス越しに、軍服姿の若い兵士四人が一行になって運動場に出てくるのが見えた。万国旗の連なる杉の木に敬礼して、駆け足で村人の中に戻っていった。

「戦地からお帰りになったんだ。戦死の知らせはあっても名前を書いた紙が入っただけの白木の箱が送られてきた方も多かったからね。遺骨はまだ遠い戦地に残されたまま。それがやっと帰っておいでになられた」

民子は手を合わせて、英霊を迎えていた。

「おらが子供のころ戦争が始まって、奥養老の村々からも若い人が次々に出征していったんだ。小湊の養老溪谷駅、そのころは朝生原駅といってたけどね。それに上総大久保、月崎の駅で大人たちと一緒に日の丸の旗をふってバンザイ、バンザイと出征兵士を何人も見送ったんだ。母親たちは木の陰でこっそり泣いておられた。いま、お母さんと息子さんが手をとりあって運動会を見てるよ、きつと。運動会ができてホントによかったね。ゲンさん」

涙を拭き終わった民子がパッと顔をあげ、喜色を満面に浮かべた。

「盆踊りが始まるよ。運動会と盆踊りが一緒に戻ってきてくれた」

いつの間にか、運動場の真ん中に太い柱でやぐらが建てられていた。折よく月が雲間に隠れ、一面を薄い闇が包み込んだ。数知れない提灯が宙に浮いて、あたりを淡く照らしている。派手な花柄の浴衣姿が幾重にもやぐらをとり囲み、踊りの輪が大輪の花のように運動場いっぱい広がった。

「お父さん、やぐらの上で太鼓たたいているよ。笛を吹いているのは、大工のマッさんと酒屋の旦那のコウゾウさんだね」

太鼓の音も笛の音も耳には届かないが、民子は立ち上がって調子を合わせて踊りだした。

運動場の薄闇のなかに花柄の浴衣の波が浮かび上がる。そろって手をたたき、両手を頭の上に丸くかかかって左右に広げる。前に後ろに足を動かし、クルリとひと回り。一糸乱れる盆踊りは長く続いた。

源二郎は、幼いころに可愛いがってくれた祖父母を踊りの輪のなかに探したが、それらしい姿はなかった。

雲が切れて満月が顔を出した。眩しい月の光に押し流れるようにやぐらも提灯も踊りの輪もスーと消えていった。

民子が、耳元で興奮を抑えた声で言った。

「いよいよ最後の上、中、下の部落リレー競争だよ。ほら、ハチマキとバトンを持って選手が出てきた。上部落のハチマキとバトンは赤、中部落は白、下部落は緑。それぞれ部落ごとに手作りしたんだ」

リレーと聞いて、源二郎も胸が高まった。引っ込み思案で目立

つことは苦手にしてきたが、走るのは得意で、運動会では小、中、高校とリレーの選手に選ばれていた。

今の学校の運動会は赤組、白組に分かれてのリレー競争になっているが、かつて小さな村だったころの運動会は地域ぐるみのお祭り。部落別対抗のリレー競争はそのハイライトだった。

小学生から中学生、青年、壮年と男女混成のチームでバトンをつなぐ。普段は運命共同体の村人も対抗意識を燃やし、応援も熱狂的だったと祖父母や親たちから聞いていた。自分もスタートラインに立っているような血の騒ぎを覚えながら、源二郎はガラス窓に顔をくつつけて見入った。

赤、白、緑の竹のバトンを手に三チームの選手が並んだ。

「上の四年生の女子はおらのあねさん、六年生の男子はあにさんだ。あねさんは埼玉の大宮、あにさんは東京の八王子に住んでいたけど、ふたりとも帰ってきて子供に戻ったんだ。おらの兄妹がみんなそろったよ」

民子がまた涙ぐむ。

「下の選手のなかに並んでいるの、タミさんの担任の先生じゃないかな」

源二郎の小声に、民子は「ホントだ」と声を上げた。

「ジュンペイ先生は国体で走ったこともあってね。あんまり速いから運動会のリレーには出してもらえなかったんだけど、今夜は走るんだ。全部追い抜いて、下が優勝するっぺ」

一年生の三人が飛び出してリレーが始まった。民子の姉も兄も速い。中学三年まで上が先頭でバトンを渡した。民子の予想通り、

青年のびりでバトンを受け取ったジュンペイ先生があつという間に二人を抜き去って、壮年の温泉旅館の女将さんにバトンを渡し、そのまま下部落が一番でゴールインした。

「ほら見て、応援席で下の人たちが躍り上がって喜んでるよ。こつちでは上と中のみんなが悔しがってわめいている」

民子の視線の先に源二郎も目を向けたが、白砂の周囲には新たな華やきを感じられた。

「さあ、みんなでそろってのごちそうの時間だよ。昔は家族や親せきごとに重箱を囲んで、お酒を飲みながらにぎやかに楽しんだ。運動会はお祭りだったからね。おらたちも一緒にいたかどうかね。お神酒を少し持ってきたから、ゲンさん、どうぞ」

民子の注いでくれた茶碗のお神酒を口にした途端に臉が重くなり、眠りに吸いこまれた。

ひんやりとした空気が体を包み込む気配に目が覚めた。ガラス窓から朝日が差し込んでいる。窓の外の運動場は白砂から草むらに戻っていた。風が草の葉をゆらし、虫の音が響き渡っている。

集会所に民子の姿はなかった。納戸を開けると段ボール箱のなかに万国旗や竹のバトン、ハチマキ、モミ殻袋の玉入れの玉がきちんと納められていた。

「やっぱり夢を見ていたんだな。それにしてもどこからどこまでが夢だったんだろうか。集会所にきて昼寝してから今朝起きるまでか。タミさんも同じ夢をみていたんだろうか」

千々に乱れる思考を拭きはらうように、源二郎は集会所の炊事場に入って、水道の水で顔をジャブジャブ洗った。

運動場の草むらを端から端まで歩いてみた。月明りの白砂の上で走り踊った運動会の熱気を残すものは何もなかった。

消防団詰め所の駐車場からバイクに跨って民子の家に向かう。家のそばまでくると、庭から横浜ナンバーの車が出ていくのが見えた。車の屋根の上に白い運動靴のようなものが乗っかっている。車がカーブで林の葉陰に隠れる直前、車の屋根から白い鳩が舞い上がり、大福山の頂上へ向かって飛ばたいといった。

〈これまた夢か、現か幻か〉

源二郎は、白鳩の飛び去った山の峰々を畏敬の念でじっと見つめた。様々な思いが脳裏に去来する。

〈現世と来世を問わず、どこにいても生まれ育ったふるさととはひとつしかない。しかし、時代とともに生まれた土地は姿を変え、昔の面影は失われている。この養老溪谷の地も同じだ。天におわす雲上人はふるさとの姿を見失って嘆き悲しんでおられるのではないか。その切実な望郷の思いが月夜の運動会となってタミさんの夢に現れたのだろう。昨夜だけの運動会で終わっていいのだろうか。タミさんはもういない。タミさんと一緒に夢をみた自分は何かやることがあるのではないか〉

源二郎は、郵便局を定年退職した後の自分のやるべきことを考えた。これまで地域の活性化や高齢者の助けになるような活動に積極的に取り組んだことのない我が身に恥ずかしさが募った。

時代の変化に流されない風土に根付いたふるさとづくり。自ら先頭に立って進む道筋がおぼろげに浮かび上がった。小学校の跡地を地域の伝統文化や歴史遺産などを発信する基地として整

備。子供と高齢者が伝統芸能、工芸、郷土料理などを一緒に楽しむイベントを企画する。

満月の夜に、先祖の供養のための運動会や盆踊りができないか。いろんなアイデアが次々に頭に浮かんだ。

〈仲間を集めて新たなふるさとづくりの組織を立ち上げよう。観光客のためではない自分たちの安らぎと夢のある里をどうつくるか、知恵の出どころだ。何よりもタミさんがいつでも帰ってこられる場所を用意しなければなんねえ。〉

そう思いながらバイクを発進させた。

「郵便配達の仕事を終えたら、この地に縁のあるすべての人にふるさとの思いを伝える心の配達員。それも悪くないな」

声を出して風に語りかけ、ひばりが空高くさえずる山里をあとにした。

〈了〉